

## ボルツァーノの自傳

西田幾多郎

在獨の三木清君がハイデルベルクの本屋で古本を漁つて、ボルツァーノの自傳を見出したといふので、私に送つてくれた。私には珍らしいものと思はれるから、少し紹介して見る。

ボルツァーノの自傳といふのは五十歳位の時にボルツァーノが親しくして居た或夫人の求によつて書いたものらしい。ボルツァーノの父は以太利生れであるが、幼時からベーマンで育つたので、ベーマンを故郷の様に思つて居た。美術品の輸出商であつたが、正直に薄利に甘んじて居たから、富有にはなれなかつた。日曜には能く書物を讀んださうである。ボルツァーノは特に母を敬慕して居る様である。母といふのは俗を嫌ふて尼になる覺悟

で居たのを、ボルツァーノの父がその美貌と敬虔なる性質に魅せられて、結婚を申込んだ。母はその兩親の勸により、心ならずも、之に應じたのであるが、ボルツァーノは千人に一人とないよき妻よき母となつたと云つて居る。ボルツァーノの母は信心深い謙遜な性質で、世の常の母親に有勝な自分の子を値打以上に思ふ様なことはなかつた。母は非常に子供を愛し、子供の病氣の時などは日夜その傍を離れなかつた。然るに不幸にもこの母は十二人の子を有ちながら、その中十人は彼女に先つて死んだ。而もどの子も能く成長した後、長く長く病みに病んで、死んで行つた。ボルツァーノは此等の不幸の外に、母自身の病氣や、父の商業上の失

敗など思へあはせば、世に我母程不幸な人はなかつたと云つて居る。次の二句が能く母の生涯をあらはすものだと云つて居る。

Meiner Freuden waren eins, zwei, drei, vier;  
Meiner Leiden Meeresandmahl, Sternenzahl!

我が喜は一二三四

我が悲は濱の砂子に空なる星數

ボルツァーノは此母の第四の子であつた、ボルツァーノを身ごもつて居る中に母が數々の不幸に憐んだので、ボルツァーノは生れながら弱い子であつた子供の時から極めて質素に暮らす習慣を得たが、怒り易いのが、惡癖であつたと云つて居る。

父母ははじめボルツァーノに畫と音樂とを教へたが、畫の方は眼が悪いのでできず、音樂は全くためであつた。後にボルツァーノが深い興味を有ち獨創的貢獻までなした數學も、最初の中は中々理解しにくかつたと云ふ。友達に説明を聞き歩いた

など云つて居る。數學と同じく哲學もはじめ理解が遅かつたさうである。特に論理學が分り苦くかつたといふのも、後に Wissenschaftslehre を書いたボルツァーノとしては面白い。或は此等は却つてボルツァーノの獨創的な頭腦を示すものであるかも知れない。

父はボルツァーノを商人とする積りであつた。併しボルツァーノが學者とならうと言ふのは反對はせなかつた。唯ボルツァーノが神學を勉強しようといふのには、父は強く反對したと云つて居る。

以上はボルツァーノの幼時の事を少しばかり書いて見たに過ぎない。自傳は八十八頁あつて、始に肖像がついて居る。